



Young Ophthalmologists Committee Hot Topics !



Instagram

若手医師国内交流プログラム参加報告 Part 2 (大阪大学・京都府立医科大学)

日本眼科学会戦略企画会議第二委員会
Young Ophthalmologists Committee

前回(第3回)のコラムでは、Young Ophthalmologists Committee(YOC)メンバーの一部(4名)が若手医師国内交流プログラムを利用して試験的に他施設を訪問していますが、その一部(神戸アイセンター病院・杏林アイセンター)をご紹介させていただきました。今回は前回に引き続き、実際にプログラムを利用して交流された残りの YOC メンバーの報告書をご紹介します。なお、2024 年度には、正式な第 1 回の若手医師国内交流プログラムの採用者 10 名を決定し、すでに全員が希望施設での交流を終えています。今後、機会を設けて、学会の YOC シンポジ

ウムや、YOC ブース〔次回は第 79 回日本臨床眼科学会(2025 年)会場のホールに設置される予定です〕、本コラムにて、第 1 回若手医師国内交流プログラム採用者 10 名をご紹介できればと考えております。採用された 10 名の先生方からのフィードバックも受けて、さらによりよいプログラムにしていけますので、また今年度も興味がある先生方はぜひ応募いただきたいと思います。



写真 1

左から医局長の橋田徳康先生、網膜外来の原千佳子先生、橋本りゅう也、YOC で一緒に活動している渡邊敦士先生、網膜外来の藤本聡子先生と一緒に。



写真 2

大阪大学病院の敷地内にある岸本記念医学資料館。

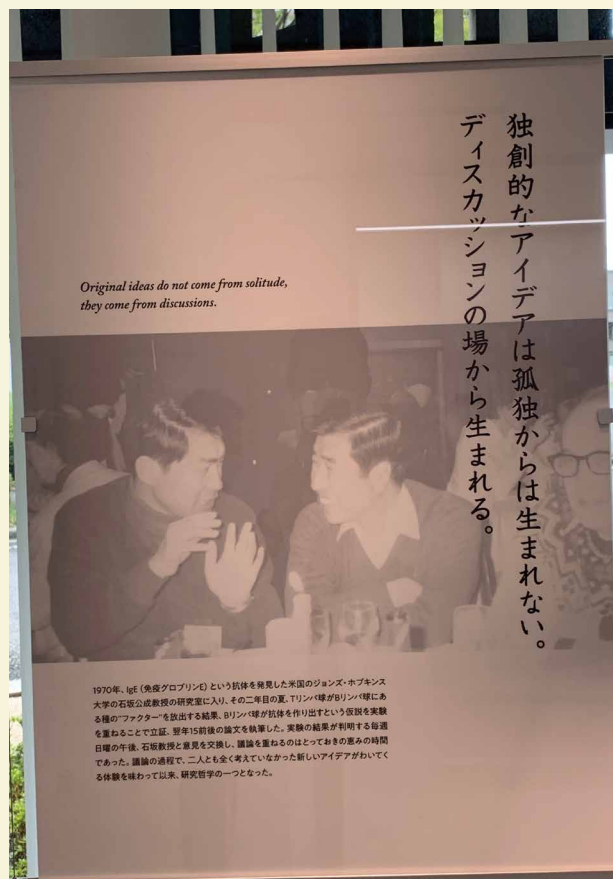


写真 3

岸本記念医学資料館の展示室には岸本忠三先生の言葉が多数掲げられています。

横のつながりから研究・国際化へ—大阪大学眼科学教室訪問を通じて

橋本りゅう也(東邦大学医療センター佐倉病院)

2023年9月19日から21日の3日間、YOC国内交流プログラムの本格始動に先立つ試みとして、大阪大学眼科学教室を訪問・見学させていただきました。

YOCが掲げる理念は、「横のつながり＝人的交流」から「研究」、そして「国際化」へと発展する土壌を育むことにあります。千葉県佐倉市の私立大学病院で育った私にとって、国内外の研究者や臨床医、大学院生、さらには医師以外の研究者が共存し、活発に交流する阪大眼科の環境は非常に新鮮で、多くの刺激に満ち溢れていました。特に印象に残ったのは、日本眼科学会戦略企画会議第二委員会委員長・西田幸二教授による明確なビジョンに基づいた研究環境の構築、そして各専門領域の臨床医同士が有機的に連携する体制です。この訪問を通じて私が最も強く感じたのは、自施設とは異なる文化や環境に身を置くことで、自分自身の立ち位置を客観的に捉え、将来の方向性を再考する貴重な機会になる、ということでした。

熾烈なグローバル研究競争のなかで、今改めて実感

するのは、「日本人研究者」としての個性、アイデンティティ、そしてオリジナリティの重要性です。それは、全国の施設に所属する若手研究者一人ひとりの挑戦と創造の積み重ねによって形づくられるものであり、YOCの果たすべき使命とも重なります。

見学の締めくくりには、医局長・橋田徳康先生のご案内で、岸本忠三先生の記念館を訪れる機会にも恵まれました。そこで出会った言葉—

「流行を追ってはいけない。流行の研究を追う限り、流行を生んだ人を超えることはできない。そして、独創的なアイデアは孤独ではなく、ディスカッションの場から生まれる。」

この言葉は、まさにYOCが目指すべき方向性そのものを象徴していると実感しました。

大学病院での臨床、研究、教育、学会、委員会と多忙を極めるなかで、時に心が折れそうになる瞬間もあります。しかし、「継続こそが創造を生み、それが生きた証を残す」という思いを胸に、自分自身、眼科医としてできることを粛々と行っていきたい。今回の大阪大学の訪問は、そんな思いを再確認する3日間となりました。



写真 4

外園教授をはじめ京都府立医科大学眼科の先生方との食事会を、YOC リード役と一緒にしていた田中 寛先生が企画してくれました。

この経験を糧に、YOC では今後も人的交流の輪を広げ、若手眼科医の研究力・国際発信力のさらなる発展を目指して活動を進めてまいります。引き続き、温かいご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

学びと気づき～YOC 国内交流プログラムを通じて

竹溪友佳子(東京大学)

知らない環境での「学び」とは、時に予想以上に大きいものです。私は YOC 国内交流プログラムの試験的導入として、京都府立医科大学眼科を 3 日間訪問する機会を得ました。今回の訪問は、目からウロコなことが多い貴重な経験となりました。

迷いの末に選んだ京都

当初、訪問先として東京歯科大学市川総合病院も候補に上がっていました。しかし、距離的な制約や、これから始めようとしている「再生医療」に焦点を当てたいという思いから、最終的に京都府立医科大学を選びました。初日の朝は地理的に不慣れなこともあり、早く到着しました。そのため、大学の対面にあるお寺の空き地を散歩する時間ができました。その静寂さは、東京ではなかなか味わえないもので、心が洗われるような感覚を覚えました。

初日：外来見学とラボ訪問

初日は医局の案内と外来見学からスタートしました。医局と外来が同じ階にあり、ほぼ隣接していることに驚きました。すでにある建物の改築は難しいかもしれませんが、医師の効率を考えると、このような設計は非常に合理的であり、是非、他の施設でも今後新設の際に導入すると良いと感じました。また、YOC メンバーの田中 寛先生にラボを案内していただき、アイバンクの方や大学院生とも交流できました。

2 日目：再生角膜上皮細胞シート移植手術見学

今回の訪問の最大の目的である「再生角膜上皮細胞シート移植手術」の見学をしました。全層角膜移植も同時に行われたため、手術は 5 時間近くに及んだにもかかわらず、術者の外園千恵先生は手術中も手技のノウハウを詳しく説明してくださり、現地で学ぶことの重要性を改めて実感しました。また、手術翌日の術後管理についても学ぶことができ、自施設での術後管理に対する不安が大きく軽減されました。

3 日目：専門外来での学び

最終日は専門外来を見学し、稲富 勉先生と北澤耕司先生からは、診療の知識だけでなく、教育体制や研究についても貴重なお話を伺うことができました。

おわりに

3 日間でどれだけ学べるか最初は不安もありました

が、それは杞憂に終わりました。学生時代とは違い、知識と経験がある程度備わっていることが学びの効率を上げたのだと思います。受け入れ先の先生方のレベルはいつも高いですが、それを活かせるかどうかは自分次第だということを実感しました。

YOCは今後、この国内交流プログラムをさらに広げ、システムを改善していく予定です。これが全国の眼科

医や医療体制に良い影響を与えられるなら、それにまさる喜びはありません。

京都府立医科大学の先生方、そしてサポートしてくださった日本眼科学会に心から感謝します。この経験を糧に、さらに成長していきたいと思います。

(文責：土屋俊輔)